

## 序 文

高 橋 忠 彦

本書の作成刊行の目的は、主として二つの点にある。第一は、中世の多くの古辞書の形成、発展、変化に於いて、意味分類体辞書すなわち和名集類が、いかに多大な影響を与えたかを明らかにすることである。第二は、その和名集類に属する、家蔵の文献二種（ここでは「慶長本頓要集」と「高橋本和名集」と名付ける）を、新出資料として紹介することである。

第一の点を扱ったのが、第一部「意味分類体辞書の研究」にまとめた諸論文である。その一部は総論的性格が強いが、大多数は和名集類に属する個別の辞書を扱った「各論」であり、以下のような問題意識、もしくは想定に支えられている。一、和名集類のようなシソーラス的辞書は、当時の社会に於ける、ある特定の階層の初学者が、文化的教養を身に付けるために作成されたものであり、そのような目的意識から分析理解が可能であること、二、和名集類は独立したものでなく、他の形態の辞書、例えば和名類聚抄や節用集類から影響を受けたり、与えたりしながら、発展してきたこと、三、和名集類に属する辞書の間には、当然ながら系統関係を想定することができること、四、往来物等の語彙資料を大幅に取り入れていること、五、和名集類に限ったことではないが、辞書の成立事情と方言的要素は関連していること、等である。第一部所収の論文は、これらの論点について、地道ながら具体的な考証を重ねた成果として御理解いただきたい。

第二の新出資料については、第二部「慶長本頓要集の研究」の諸論文、第三部「高橋本和名集の研究」及び、それ

それぞれの「影印」、「翻字本文」、「注釈」、「語彙索引」、「漢字索引」が扱っている。慶長本頓要集については、概要を「日本語の研究」第一四巻四号に掲載したところであるが、従来知られていた瀧田本頓要集と祖本を共有する辞書である。ことに大幅な増補の跡が見られ、その点にこそ、中世の辞書編纂の様相を窺うことができる。第二部の諸論文は、その方法論と問題意識は、概ね第一部と通底するものであるが、結果として、和名集類（有坂本類、天理本類）、また、節用集、下学集、倭玉篇等の辞書資料が、増補資料として用いられている様相が解明された。同時に、薩摩国で編纂された慶長本頓要集が、その地域性に於いて、村上文庫本継志集及び慶應本色葉集と関係付けられることも確認された。他方、高橋本和名集は、管見の限りでは、最小規模の和名集である。本文と紙背文書の両方に、大乘院雑筆集との関係が想定され、小型の実用辞書編纂の具体的過程が浮かび上がるものである。両書に関する注釈・索引は、今後の中世日本語の研究に活用していただければ、望外の喜びである。